

第2 言語読解における未知語の意味推測研究の概観 — 下位レベルの推測ストラテジー使用に着目して —

山方 純子

An Overview of Research on Lexical Inferencing in L2 Reading Comprehension — Focusing on Use of Low Level Strategies —

Junko Yamagata

1. はじめに

読解と語彙知識は、密接な関係にある。迅速で円滑な読解には文字や語といった下位レベルの言語処理スキルが重要であることが指摘されているように、語彙知識は読解に必要不可欠なものである。それと同時に、語彙知識は読解を通して拡大するという側面を持つ。しかし、第2言語（L2）での読解の場合、読み手のL2は発達途上にあり、語彙知識も十分ではない場合が多いため、未知語に遭遇する可能性が高い。このテキスト内に存在する未知語と、読み手との相互作用によって理解を構築していく方法の一つが、「未知語の意味推測」であると言えるだろう。未知語の存在は読解の妨げになると考えられるため、L2読解における未知語の意味推測は、まとまりのあるテキストを理解する上で重要課題の一つに挙げられる。

このL2読解における未知語の意味推測もまた、読解と語彙学習の両領域が重なり合った部分に関わる問題である。即ち、正確な読解にも語彙知識の増進にも未知語の意味推測が必要である一方で、意味推測の成功には読解力と語彙知識の両方が要求されるという双方向の関係が認められる(Koda 2005)。従って、L2読解における未知語の意味推測は、読解という言語処理に焦点を当てた場合には、読解ストラテジーの一部として、語彙という言語知識の習得に焦点を当てた場合には、付随的語彙学習の方法の一つとして扱われることになる。

本稿では、読解ストラテジーとしての未知語の意味推測を扱い、先行研究の

言語科学研究第13号（2007年）

概観を通して、特に未知語の意味推測における語や文字といった下位レベルの言語処理の重要性について考えることを目的とする。未知語に関する情報や知識は、ある程度のL2習熟度を要求する文脈手がかりとは異なり、学習者にとって最も使いやすい手がかりであり、実際の利用頻度も高いことが、複数の先行研究から明らかにされている。従って、学習者による未知語の意味推測を考察する上で、下位レベルの言語処理は必要不可欠なものではないかという解釈に基づき、以下、(1) 未知語の意味推測の手がかりに関する先行研究、(2) 語彙処理ストラテジーとしての未知語の意味推測、(3) 下位レベルのストラテジーによる未知語の意味推測の問題点、(4) L2日本語読解における未知語の意味推測、の4点について論じる。

2. 未知語の意味推測の手がかりに関する先行研究

学習者の未知語の意味推測に関する先行研究の多くは、推測するのにどのような手がかりを使用しているのかという問題を取り上げている。これは、特に1990年代初め頃の研究の中心的な興味であり、学習者は局所的な手がかりを多用すること、L2習熟度が高い読み手ほど文脈を利用すること、等が明らかにされている（Arden-Close 1993, Chern 1993, Haynes 1993, Huckin & Bloch 1993等）。

Arden-Close (1993) は、L2習熟度レベルが異なる英語学習者3名のテキスト読解から、未知語の意味推測ストラテジーを比較し、レベルによる違いを観察した。その結果、習熟度の高い読み手は段落よりも広範囲の文脈を使用するが、習熟度が低いほど語形に依拠する傾向にある、と述べている。

Huckin & Bloch (1993) は、中国語を母語とする中級英語学習者3名を対象に行った事例研究である。学習者は、意味推測のほぼ全てで文脈を使用し、半数以上で未知語と同一文中にある語を手がかり語として利用していることが明らかになった。更に、未知語意味推測の手がかりを、局所的な言語要素、テキストの全体的な要素、世界知識の三つに分類し、特に学習者によく使われるのが局所的な言語要素である、と結論付けている。更に、まず対象語の語形に注目し、その意味について自分なりの仮説を立て、それを確認するために、対象語と同一文中に存在する直接的に関連のある手がかり語を利用するという、

Note and Discussion

学習者が意味を推測する際の手順を提示した。

Haynes (1993) では、様々な母語背景の中上級レベルの成人英語学習者63名を対象に、意味推測の対象語として、推測に全体的な情報統合が必要な語、局所的な情報の参照で推測が可能な語の2種類の未知語（無意味語）を用意した。データ分析の結果、学習者の母語背景に関わらず、全体的な文脈よりも局所的手がかりを利用する語の方が意味推測の成功率が高いことが観察され、語形や綴り、音、等の対象語そのものに焦点を当てて分析する局所的ストラテジーの方が、学習者には有効である、との結論が導き出された。

Chern (1993) は、中国語母語話者である成人英語学習者を対象にした調査であり、英語習熟度が高いほど全体的な手がかりを利用することを明らかにした。このことから、全体的手がかりの利用には、ある程度の習熟度が必要であると言え、習熟度の低い学習者は、局所の手がかりへの依存度が高いことが予測される。

その後、推測ストラテジー使用に関わる知識の種類を調べる研究が登場した。それまでの研究では、推測の手がかりとしてテキスト内の言語情報に注意が向けられ、L2 習熟度と推測手がかりの使用との関係の解明が進められてきたが、次第に推測ストラテジーを活用するのに必要とされる知識源 (knowledge resource) の存在が注目されるようになってきた。世界知識や母語知識といったテキスト外の知識も含め、より広範で様々な知識を利用することも明らかにされている (Bengeleil & Paribakht 2004, Nassaji 2003, Paribakht & Wesche 1999等)。

Paribakht & Wesche (1999) は、未知語の意味推測に用いられる知識を、言語知識と非言語知識とに分類している。非言語知識とは世界知識を指し、言語知識の下位区分として談話レベルのテキスト表象、文レベルの文法知識、語の形態素、句読法、同義語、語からの連想、同族・同源の語の利用といった知識源が挙げられている。データ分析の結果、学習者はテキスト内の言語知識のみならず、テキスト外の非言語知識も利用していることが観察され、中にはその両者を組み合わせる場合もあった。

Bengeleil & Paribakht (2004) の分類でも、未知語の意味推測に利用される知識は言語知識と非言語知識（トピック知識、世界知識）に分けられ、言語

言語科学研究第13号 (2007年)

知識は目標言語に関するもの（語レベル、文レベル、談話レベル）と母語に関するものに下位分類された。調査の結果、L2読解における未知語の意味推測では様々な知識源が使われ、目標言語の知識と同様、母語知識や世界（背景）知識も動員されることが明らかにされた。このことから、意味推測プロセスにおいては、読み手が既に備え持っている言語的知識、及び非言語的知識が、未知語を含むテキストと相互作用を起こす、と考察している。

ストラテジーとその使用に用いられる知識源を明確に区別して類型化したのが、Nassaji (2003) である。未知語の意味推測に使用される知識源として五つ（文法知識、形態的知識、母語知識、世界知識、談話知識）、推測ストラテジーとして5タイプ（繰り返し、検証、分析、モニター、自問自答、類推）を提示した。学習者に最も高頻度で使用されたのは世界知識、次いで形態的知識が続き、談話知識と母語知識の使用はごくわずかで、成功率は、形態的知識、世界知識の順で高いことから、学習者はテキスト内外の知識を利用していることが確認された。この結果を受けて、推測成功のためには適切なストラテジーを使うだけでなく、テキスト内外の様々な知識源との適切な組み合わせと調整が必要である、としている。

これまで先行研究から、学習者の意味推測にはテキスト外情報を含む様々な知識源が使用されること、特に局所的手がかりが多用されること、文脈はL2習熟度が高いほど上手く利用できること、を確認してきた。ここから、トップダウン処理、ボトムアップ処理という読解プロセスの影響が窺える。この二つのプロセスは相互作用的に働いて情報を処理する（インターアクション処理）と考えられているが、ボトムアップ処理重視の反動から、かつてはトップダウン処理が集中的に脚光を浴びた。しかし、余りにトップダウン処理が強調されすぎたため、その反省を踏まえて、後に読みにおける下位レベルの言語処理の重要性を見直す動きが現れた (Grabe 1991)。これを未知語の意味推測に照らしてみれば、テキスト全体の文脈手がかりや世界知識などの利用がトップダウン処理、未知語そのものや未知語を含む文などの局所的手がかりの利用がボトムアップ処理に当たると言えそうである。読解と同様に、この二つのプロセスは、未知語の意味推測に両方とも重要であり、相互に作用して未知語を処理する可能性も考えられる。

Note and Discussion

しかし、L2 習熟度の低い学習者の場合、文脈を活用できずに未知語自体の語分析を行う傾向が顕著に見られたという事実を踏まえると、初級学習者にとって、最も身近で、利用しやすく、実際に使用しているのが、未知語そのものに焦点を当て、その情報や知識から意味を導き出すというボトムアップの推測方法であるということになる。ある一定以上のL2 言語知識が要求される文脈の利用は、学習者にとって難しいことから、文脈手がかりは推測成功率に照らして有効だとは言えないと強調する研究もある (Bensoussan & Laufer 1984等)。それならば、学習者が未知語の意味を推測する上でまず試みる、文字や語といった下位レベルの言語処理の役割について考察することは、学習者の未知語の意味推測の実態を把握し、そのメカニズムを解明する上でも重要なのではないかと考える。

そこで次節では、未知語の意味推測における語に関連する処理に注目した立場を概観し、併せて問題点についても触れる。

3. 未知語の意味推測における下位レベルの言語処理

3.1 語彙処理ストラテジーとしての未知語の意味推測

読解における未知語の意味推測を、語をどのように処理するのかというボトムアップ・ストラテジーの一つに位置づける立場がある (Fraser 1999, Birch 2006)。

Birch (2006) は、L2 としての英語の読解における下位レベルの言語処理の重要性を主張する中で、読解プロセスを「ストラテジーとそれに対応する知識に基づいた意志決定システム」とであると定義して、図式化している (図1)。それによると、ストラテジーは上位レベルの「認知処理ストラテジー」と下位レベルの「言語処理ストラテジー」に、知識は「世界知識」と「言語知識」に区分されている。そのうち、「言語処理ストラテジー」は、下位レベルから音韻処理、正書法処理、語彙処理、統語処理の順で更に分類され、各々に音、文字 (正書法)、語やその意味、句や文といった言語知識が関連する。その中の「語彙処理ストラテジー」は、語の認識や語の意味へのアクセスに使用されるストラテジーで、文字や統語の他、テキストからの影響も受けることが示されている。未知語の意味推測は、この部分に含まれると考えられる。

言語科学研究第13号（2007年）

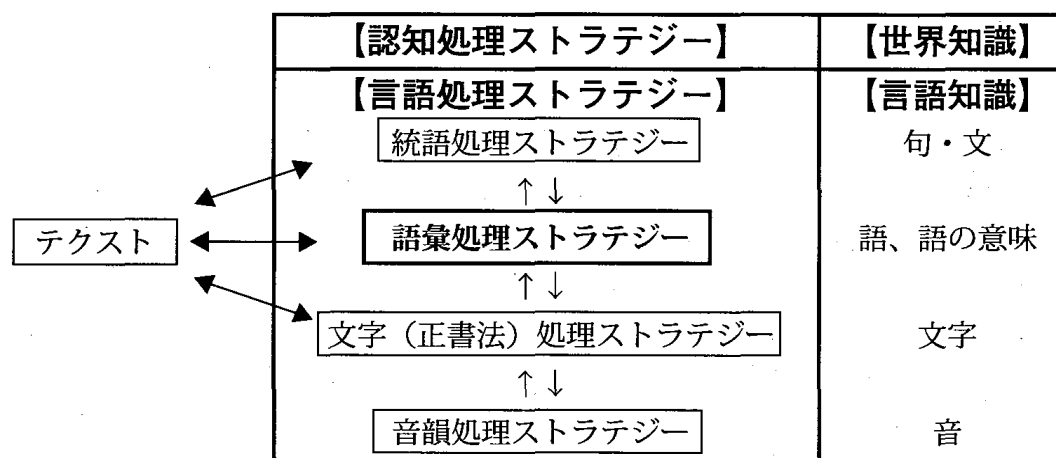


図1 テクス理解における処理ストラテジー（Birch 2006:6より）

Fraser（1999）は、フランス語を母語とする中級英語学習者8名を対象に、L2読解で未知語に遭遇した時に使用する処理ストラテジーと、それが語彙学習に与える影響力、ストラテジー指導の効果について調べた研究であるが、未知語に遭遇した時の対処法を、無視する、意味を調べる、意味を推測する、の3種類に分類し、これらを「語彙処理ストラテジー（Lexical Processing Strategies）」と定義した。このうち、推測は学習者が未知語に遭遇した時の対処方法の半数以上を占め、実際に学習者に多用される語彙処理ストラテジーであることが確認されている。更に、推測プロセスの下位分類として、「語の同定（word identification）」と「意味の創造（sense creation）」の二つを定義している。「語の同定」による推測は、語形からメンタルレキシコン（mental lexicon：心的辞書）内で母語やL2からの連想を活性化させる、迅速且つ自動的なデータ駆動型のプロセスである。従って、ここではテキストの内容や文脈情報が重要な役割を担うことはない、と考えられる。対照的に「意味の創造」は、テキスト内の言語的・状況的な手がかりを分析し、それに基づいて意味を構築していく、意図的で計画的な推測プロセスである。Koda（2005）では、単語の文字的表示から語彙の情報を導き出す処理のことを「単語認知（word recognition）」と呼んでいるが、これは「意味の創造」に包含されるものと考えられる。この推測の下位分類基準は、推測という語彙処理を行うに当たり、学習者が未知語を自動的に認識したのか、それとも語や文脈の分析によってそ

Note and Discussion

の意味を導き出したのか、という処理プロセスのタイプによるものである。従って、Birch の音韻処理ストラテジーと文字処理ストラテジーが「語の同定」に、語彙処理ストラテジーと談話処理ストラテジーが「意味の創造」に当たると思われる。即ち、「語の同定」の方がより下位レベルの処理ということになる。

このように、未知語の意味推測は語に焦点を当てた処理ストラテジーであると認識する立場があるが、これは、読解プロセスにおける語彙知識の役割を反映した考え方であると言えるだろう。

またL2学習者の語彙処理について、Levelt (1993) のモデルを応用し、特にメンタルレキシコンとの関連性から説明しようとするのが de Bot, Paribakht & Wesche (1997) である。彼らは、このモデルを使って語彙の理解プロセスを説明し、これは、L2 読解における未知語の処理、及び意味推測ストラテジー使用の理論的基盤に成り得るとしている。

元来 Levelt モデルは、第1言語 (L1) 発話の聴解プロセスを想定している。メンタルレキシコンは言語処理の中央に位置して、概念化と文法的・音韻的処理を仲介する。また、レマ (lemma: 意味や統語に関する情報を含む見出し語) とレキシーム (lexeme: 音韻的・形態的情報を含む、レマに対応する形態素) から構成されており、理解や産出においては両者を接続 (活性化) しなければならない。このモデルによれば、まずメッセージの聴覚信号が音韻的に符合化され、レキシームと照合される。次に、それを文法的に処理してレマと一致させ、概念化処理のレベルへと進んで、そこでメッセージの意図が解釈される。de Bot, Paribakht & Wesche (1997) は、語彙の理解と産出のプロセスを説明すべく、Levelt モデルの改良を試みている。図2は、そのプロセスを図式化したものである。

このモデルに照らして、未知語の意味推測は、(1) テクストの語彙 — レキシーム、(2) レキシーム — レマ、という2種類のレベル間で不一致がある場合に起こると考えられている。不一致とは、対応すべきものが存在しない、つまり、空白部分があると解釈されるため、未知語の推測は、レマ (文法範疇、項構造、等) やレキシームの空いている部分を埋める試みであると説明されている。最終的に学習者は空白部分を埋めて、既存の概念に語を結びつけるために、語の意味、形態情報、統語情報、等を収集するのである。

言語科学研究第13号（2007年）

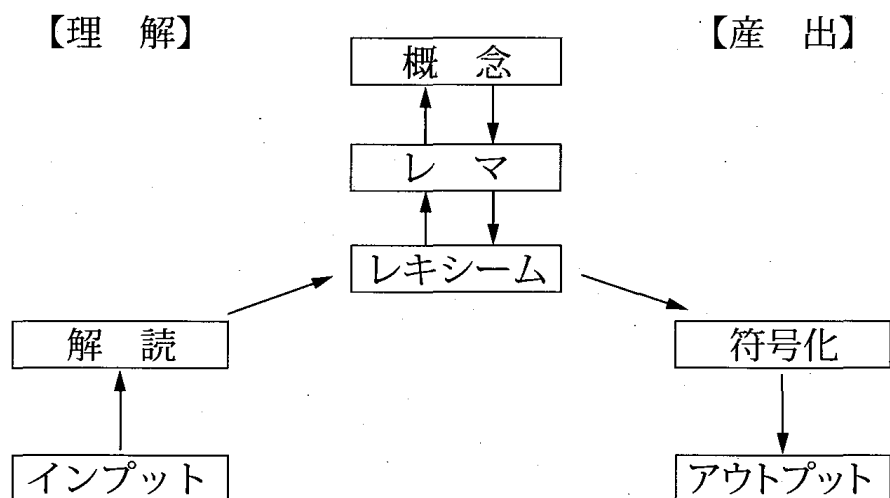


図2 語彙の理解・産出モデル (de Bot, Paribakht & Wesche 1997:315より)

de Bot, Paribakht & Wesche (1997) は、自ら提案したこのモデルを検証するために、中級レベルの英語学習者を対象に、テキスト内の未知語の対処法を、発話思考法で調査した。未知語に遭遇した場合、80%の学習者がその意味を推測しており、その際に様々な知識源を使用しているものの、知識源の5割が語の形態・統語的情報によるものだった。その他、語の品詞、句読法、同音異義語、語からの連想、同族語の知識を合わせると、語に関連する知識が、推測に用いられる知識源全体の7割を占めるという結果が得られている。ここから、学習者が意味推測に際して、未知語に関する様々な情報を得ようと試みていることが窺える。

このように、未知語の意味推測を、下位レベルである語自体の分析・処理であると位置づける立場を見てきた。語に直接働きかける方法は、それが成功すれば確実で、しかも迅速に自動化されれば、流暢な処理が期待できるため、推測におけるストラテジーの1つとして、十分な役割を果たし得ると考える。しかしながら、先述の通り、学習者はそれ以外にも、広範で様々な知識を使用することが明らかになっており、L2習熟度が高い学習者ほど、テキストの文脈情報を利用する傾向がある。推測不成功の原因の多くを、語に関する情報や知識に帰することを明らかにした研究 (Bensoussan & Laufer 1994等) もあり、未知語の意味を推測するのに語レベルの手がかりは有用ではあるが、語に関する情報や知識を手がかりにした意味推測だけでは不十分であるばかりか、誤っ

Note and Discussion

た推測をしてしまう危険性があると言える。

そこで次節では、未知語の情報に依存した意味推測の問題点について言及する。

3.2 下位レベルのストラテジーによる意味推測の問題点

語に関する情報や知識に基づいた意味推測は、学習者が実際に試みており、ある程度は成功に繋がる点で、有効なストラテジーであることは事実だが、その反面、誤った解釈に陥る危険性を孕んでいることも否定できない。これは、複数の先行研究で指摘されている問題点である (Bensoussan & Laufer 1994, Haynes 1993, Huckin & Bloch 1993, Laufer 1997)。

中上級の英語学習者63名を対象とした Haynes (1993) では、対象語が自分にとっての未知語か否かを瞬時に判断することが出来ず、確信が持てないために、どう対処すべきかの決定が遅れてしまうという結果が得られた。そのため、語形分析自体は学習者にとって自然な方法ではあるものの、単独では有効だとは言えず、その他の推測ストラテジーと統合させて再確認する必要性を主張している。

また Huckin & Bloch (1993) も、調査協力者である中級英語学習者3名の意味推測の分析から、本当は未知語なのに知っていると言見誤り、それに拘って無理なつじつま合わせをしようとして、結局深刻なエラーを招いてしまうという事態を “Mistaken ID” と呼び、これが非常に多く見られたことを指摘している。同様の結論は Laufer (1997) の実験でも得られており、その理由として、音韻や形態の類似した語と混同する、複数の意味を持つ多義語の一面しか理解していない、イディオムによって新しく生み出された意味を知らない、等のパターンを挙げている。そして、既知であるという先入観から誤った解釈をし、全体の文脈の意味を歪曲させ、別の語の意味推測にその誤った文脈を利用してしまふ、という悪循環が起こりやすいと説明している。

Bensoussan & Laufer (1994) は、上級レベルの英語学習者60名を対象とした調査から、高い習熟度レベルになっても、誤った推測のうちの43%が、多義語や語の形態素の意味に関する先入観による誤った解釈で占められている、と主張している。

言語科学研究第13号 (2007年)

いずれにしても、語に着目した意味推測は、学習者が何らかの形で利用するものの、失敗に陥る場合も少なくない、というリスクを伴うことを念頭に置く必要があるだろう。むやみに未知語だけに固執したり、その他の知識や手がかりを無視したりして、語に依存した推測ストラテジーの単独使用に拘泥することのないように、他のストラテジーと併用することが、この問題を解決する方法の一つであると考えられる。これは、読解において、ボトムアップ処理とトップダウン処理が相互に作用することが認められるのと並行的に、未知語の意味推測でも、上位レベルと下位レベルの手がかりの相互作用が有効であるという考え方に基づくもので、Mori & Nagy(1999)、Mori(2002, 2003)、Morrison(1996)等によって検証されている。

Moriの一連の研究(Mori & Nagy 1999, Mori 2002, 2003)では、英語を母語とする日本語学習者59名を対象に、漢字熟語の意味推測における語の要素や文脈からの手がかりの効果について調べている。漢字のみ(漢字2個による熟語の提示)、文脈文のみ(対象語が空欄になった文の提示)、その両方の組み合わせ(対象語を含む文の提示)の3条件を設定し、馴染みのある漢字から構成される未知の漢字熟語の意味を推測させた。その結果、単語と文脈両方の手がかりが与えられている場合には推測の成功率が高まったが、漢字か文脈かどちらか一方だけに依存しすぎると、誤った推測に陥ってしまうことから、未知語の意味解釈には様々な要素からの情報統合能力が必要であることが明らかになった。語形分析も文脈も、未知語の意味推測に効果的な手がかりであるが、両者は質的に全く異なる性質と役割を持ち、個々に独立したストラテジーであるからこそ、単独で利用するよりも組み合わせた方が有効なのだ、と結論付けている。

Morrison(1996)のフランス語学習者を対象にした研究でも、テキストの文脈情報と言語知識を組み合わせる未知語を推測するケースが多く観察され、且つ成功していた、という結果が得られている。

これらの先行研究からは、各々の手がかりが補完し合うことにより、正確な意味へと到達するという解釈が可能である。複数の手がかりや情報を必要に応じて上手く関連付けて活用できるL2読み手が、未知語の意味を正しく推測できるのだと考えられる。そして、語に関する情報や知識に基づいた意味推測は、

Note and Discussion

単独使用におけるリスクは否定できないものの、複数の手がかりを組み合わせることで未知語の意味を推測する際に、必要不可欠なものであることは間違いない、と言えるだろう。

4. L2 日本語読解における未知語の意味推測

ここまで、語の情報を手がかりとする下位レベルのストラテジーによる未知語の意味推測を中心に論を進めてきたが、最後にL2としての日本語読解に照らして考えてみたい。日本語の場合、表意文字である漢字、音節を示す表音文字である平仮名・カタカナという複数の文字表記形式があるため、学習者にとっては非常に複雑であることが予測される。

L2の様々な言語的要素に母語からの転移が起こることは、これまでの様々な研究で明らかにされているが、L2読解プロセスにおいてもそれは当てはまり、特に下位レベルの言語処理に関わる文字認識、語彙認識などの転移は、観察されやすい現象として先行研究も多い(Chikamatsu 1996, Koda 1990, Mori 1998)。これらの研究結果から、母語で使用される文字や語彙の認識ストラテジーは転移され、L2読解に影響を与えることが明らかになっている。この場合、母語とL2の文字表記形式の距離や違い、即ち、音情報に依存する表音文字か、意味に依存する表意(形態)文字か、が大きな影響を及ぼすことになる。

L2日本語読解においては、特に、母語の文字表記がアルファベット等の表音文字である、非漢字圏出身学習者の漢字の解釈が問題になる。漢字は複数の構成要素を持ち、部首とそれ以外の要素との組み合わせが様々な意味を表す。また、特定の構成要素から、意味を想起することが可能である場合も多い。母語話者も、未知の漢字に遭遇した際には、構成要素に分解し、その部分から意味を推測するという作業を行っているのではないだろうか。玉岡(2005)によれば、同じ部首を含んでいても、それが意味理解に与える影響は漢字によって異なり、(1) 部首が意味推測の直接のヒントになるもの、(2) 部首と他の構成要素の組み合わせから、意味がやや抽象化されたもの、(3) 部首の意味からは直接イメージできないもの、という3グループに分かれる。(1)と(2)に関しては、語に関する情報や知識からの意味推測が有効である可能性が高い。つまり、意味推測の成功には、対象語の意味の透明性が影響すると言える。ま

言語科学研究第13号（2007年）

た、漢字の構成要素には音韻情報を表すものもあり、対象となる漢字語への音韻アクセスが意味推測の成功に結びつくことを明らかにした研究もある（Kondo-Brown 2006, 松本 2002）ように、漢字の音が推測への有効な手がかりになる可能性も高い。このように、音・形式・意味が関連しているという漢字の特徴を踏まえた上で、未知語自体に着目して、語の情報や知識を利用した意味推測が成功に結びつくのは、どのような語や文字の場合なのかを見極めることは、誤った推測を防ぐ意味でも必要となってくるだろう。

また、母語の文字表記に表意（形態）文字を含む漢字圏出身学習者にとっては、逆に平仮名で表示される和語や、カタカナで表示される外来語の解釈が困難である可能性がある。これらが未知語である場合の意味推測については、十分な研究が行われていないため、今後の課題であると言える。

日本語学習者を対象とした未知語の意味推測研究は、まだ非常に少ないのが現状である。しかも、管見によれば、非漢字圏出身学習者による漢字語の意味推測に限られており、研究の蓄積も不十分である（Kondo-Brown 2006, Mori & Nagy 1999, Mori 2002, 2003, 谷口 1991, 松本 2002等）。意味推測の対象となる未知語の特徴と、それに有効なストラテジーの関係、更には、学習者の母語における文字表記形式や漢字知識の有無の影響等に関する研究は見られない。そもそも、英語圏で行われたL2読解における未知語の意味推測研究を、文字や音韻、語彙といった言語体系が大きく異なる日本語に応用することが可能なのか、という根本的な問題もあるかもしれない。今後は、これらの課題を整理し、L2としての日本語学習における特異性を十分に考慮した研究によって、検証を進めていくことが必要であると考えられる。

5. おわりに

本稿では、読解プロセスにおける下位ストラテジーの言語処理の重要性を受ける形で、未知語そのものに焦点を当てた意味推測プロセスに関して論を進めてきた。

未知語の意味推測はその性質から、読解と語彙の両分野が交差する部分に位置する、複雑で高度な作業であり、第2言語習得研究において非常に重要なトピックである。読解プロセス同様、上位レベルの処理（テキストの文脈情報や

Note and Discussion

テキスト外の知識）と下位レベルの処理（語や文字に関する言語処理）の相互作用が、未知語の意味推測を成功に導く可能性が考えられる。先行研究の成果から、L2 習熟度が高いほど文脈を効果的に活用できる傾向が認められ、これが有効なストラテジーであることは勿論だが、語に着目し、その情報に依存したストラテジーを軽視するべきではない。

また、未知語の意味推測は、実際に多用されているにも関わらず、学習者にとっては非常に困難なストラテジーでもある。有効な手がかりとされる文脈情報の利用は、ある程度の L2 言語知識を有していなければ不可能であるため、未知語に遭遇する機会が多くて、本当に必要に迫られている習熟度の低い学習者は利用できず推測に失敗してしまう、というパラドックスに陥ってしまいかねない。従って、危険性を孕んでいる事実も踏まえた上で、どのような場合に、どのような方法が有効なのかを整理できれば、教育現場への応用も可能になると思われる。未知語の特徴（語種、品詞、文章内での重要度、出現頻度、等）と有効なストラテジーとの関係、更には学習者要因（母語、L2 習熟度、等）の影響を調べることも有益であろう。実証研究によって学習者の未知語の意味推測のメカニズムを解明し、それを実践に効果的に結び付けるための指導法やカリキュラム、教材の開発のための研究を進めることも、今後の重要な課題だと考える。

近年、未知語の意味推測に影響を与える要因を探るべく、様々な観点からの研究が発表されている。例えば、Paribakht (2005) は未知語の母語語彙化（母語でほぼ等しい語彙があるか否か）の影響、Nassaji (2004) は学習者の語彙知識の深さの影響を調べている。関連研究の幅も広がり、検証される事柄も増えつつあるが、データ収集法、分類の基準や方法、名称等が統一されておらず、比較対照が難しく、研究が分散しているという印象がある。今後は、これまでの研究成果を統合するための統一的な基準や概念の確立が必要であると考えられる。それと共に、更に研究を積み重ねて、学習者の未知語の意味推測というプロセスの本質を探り、そのメカニズムを明らかにすることで、理論的枠組みを構築することが求められるだろう。

言語科学研究第13号（2007年）

〔謝辞〕

本稿は、筆者執筆の神田外語大学大学院修士論文『日本語学習者のテキスト理解における未知語の意味推測—言語習熟度と母語背景によるストラテジー使用への影響—』（2006年1月提出）の一部に、加筆修正を加えたものである。丁寧且つ親身にご指導いただいた堀場裕紀江先生に、心より御礼申し上げる。また、査読をお引き受けいただいた小林美代子先生、岩本遠億先生にも、感謝の念を表したい。

〔引用文献〕

- 谷口すみ子（1991）「思考過程を出し合う読解授業：学習者ストラテジーの観察」『日本語教育』75, 37-50.
- 玉岡賀津雄（2005）「サンズイとイトヘンはどのくらい漢字の意味に影響するか」『広島大学留学生センター紀要』15, 11-24.
- 松本順子（2002）「日本語学習者の漢字理解に文脈支持が与える影響—英語母語話者の場合—」『日本語教育』115, 71-80.
- Arden-Close, C. (1993). NNS Readers' Strategies for Inferring the Meanings of Unknown Words, *Reading in a Foreign Language*, 9 (2), 867-893.
- Bengeleil, N.F., & Paribakht, T.S. (2004). L2 Reading Proficiency and Lexical Inferencing by University EFL Learners. *The Canadian Modern Language Review*, 61 (2), 225-249.
- Bensoussan, M. & Laufer, B. (1984). Lexical Guessing in Context in EFL Reading Comprehension, *Journal of Research in Reading*, 7 (1), 15-32.
- Birch, B.M. (2006). *English L2 Reading : Getting to the Bottom*. (2nd Ed). Mahwah, New Jersey.
- Chern, C. (1993). Chinese Students' Word-Solving Strategies in Reading in English. In Huckin, T., Haynes, H., & Coady, J. (Eds.), *Second Language Reading and Vocabulary Learning* (pp. 67-85). Norwood, NJ : Ablex.
- Chikamatsu, N. (1996). The Effects of L1 Orthography on L2 Word Recognition : A Study of American and Chinese Learners of Japanese. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 403-432.
- de Bot, K., Paribakht, T.S., & Wesche, M.B. (1997). Toward a lexical processing model for the study of second language vocabulary acquisition : Evidence from ESL reading. *Studies in Second Language Acquisition*, 19, 309-329.
- Fraser, C.A. (1999). Lexical Processing Strategy Use and Vocabulary Learning through Reading. *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 225-241.
- Grabe, W. (1991). Current Developments in Second Language Reading Research. *TESOL Quarterly*, 25, 375-406.
- Haynes, H. (1993). Patterns and Perils of Guessing in Second Language Reading. In Huckin, T., Haynes, H., & Coady, J. (Eds.), *Second Language Reading and Vocabulary Learning* (pp. 46-64). Norwood, NJ : Ablex.
- Huckin, T., & Bloch, J. (1993). Strategies for Inferring Word-Meanings in Context : A Cognitive Model. In Huckin, T., Haynes, H., & Coady, J. (Eds.), *Second Language*

Note and Discussion

- Reading and Vocabulary Learning* (pp.153-178). Norwood, NJ : Ablex.
- Koda,K. (1990) . The Use of L1 Reading Strategies in L2 Reading : Effects of L1 Orthographic Structures on L2 Phonological Recoding Strategies. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 393-410.
- Koda,K. (2005). *Insights into second language reading : A cross-linguistic approach*. Cambridge University Press.
- Kondo-Brown,K. (2006). How Do English L1 Learners of Advanced Japanese Infer Unknown *Kanji* Words in Authentic Texts,*Language Learning*, 56 (1),109-153.
- Laufer,B. (1997). The lexical plight in second language reading : Words you don' t know, words you think you know, and words you can' t guess. In Coady,J., & Huckin,T. (Eds.), *Second language vocabulary acquisition* (pp.20-34). New York : Cambridge University Press.
- Levelt,W.J.M. (1993). Language use in normal speakers and its disorders. In G.Blanken, E.Dittman, H.Grimm, J.Marshall, & C.Wallesch (Eds), *Linguistic disorders and pathologies. An international handbook* (pp.1-15). Berlin : de Gruyter.
- Mori,Y. (1998). Effects of First Language and Phonological Accessibility on Kanji Recognition. *The Modern Language Journal*, 82 (1), 67-82.
- Mori,Y. (2002). Individual differences in the integration of information from context and word parts in interpreting unknown kanji words. *Applied Psycholinguistics*, 23, 375-397.
- Mori,Y. (2003). The Roles of Context and Word Morphology in Learning New Kanji Words. *The Modern Language Journal*, 87 (3), 404-420.
- Mori,Y., & Nagy,W. (1999). Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds. *Reading Research Quarterly*, 34 (1), 80-101.
- Morrison, L. (1996). Talking About Words : A Study of French as a Second Language Learners' Lexical Inferencing Procedures. *The Canadian Modern Language Review*, 53(1), 41-75.
- Nassaji,H. (2003). L2 Vocabulary Learning From Context : Strategies, Knowledge Sources, and Their Relationship With Success in L2 Lexical Inferencing. *TESOL Quarterly*, 37 (4), 645-670.
- Nassaji,H. (2004). The Relationship between Depth of Vocabulary Knowledge and L2 Learners' Lexical Inferencing Strategy Use and Success, *The Canadian Modern Language Review*, 61 (1),107-134.
- Paribakht,T.S. (2005). The Influence of First Language Lexicalization on Second Language Lexical Inferencing : A Study of Farsi-Speaking Learners of English as a Foreign Language, *Language Learning*, 55 (4),701-748.
- Paribakht,T.S., & Wesche,M. (1999). Reading and "Incidental" L2 Vocabulary Acquisition : An Introspective Study of Lexical Inferencing. *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 195-224.